

ソーシャル・ディスタンスの怪

Social Distance という言葉が流行っています。和訳すれば、社会的距離です。人と人の間柄のことを人間(じんかん)といい、通常、人間(にんげん)といえ、人と人の間柄としての社会的関係性を指すのですから、改めて社会的距離と言う必要はありません。もともと、人間は単独の人を指すものではなく、社会的関係性の内に置かれている存在なのです。ところが、社会的距離という言葉が使われる場合、たいていは、「人と人の間柄」が「人と人の間」に、またその「人と人の間」が「肉体と肉体の間」に読み替えられています。(ここでは「肉体」と言っておきます。「身体」は奥行きのある重層構造をなすものだからです。)
「間柄」を「間」に、「人」を「肉体」にというように、二重の読み替えが行なわれています。人と人の関係性が、肉体と肉体の物理的次元に還元されているのです。ここに大きな錯覚ないしは誤解があることに気付いている人は、少ないように思います。

人間は一間なるか夏(蝶) (※一間は約 1.818m)
社会的距離のびやかな弱冷車

社会的距離は、この度の新型コロナウイルス感染拡大の状況下で頻りに使用され始めた言葉ですが、ここに至って従来の「距離感」が崩れ始めているように見えます。テレワークやオンライン会議・授業などの普及が加速されて、通勤・通学などの移動を自粛したお蔭で、物理的距離が克服されつつあるという局面があります。なにしろ、在宅で勤務し、また授業参加ができるのです。物理的距離は、必ずしも以前のように大きな障害ではなくなり始めています。興味深いのは、その物理的距離を克服するのに、IT という物理的なシステムとツールを使用している点です。人と人の繋がりを心で直接感得するのではなく、わざわざ物理的ツールを媒介して迂回することで確認し合っているのです。IT や ICT 関連のツールは頗る便利であり、今後もますます活用されて行くことでしょう。しかしその一方で、人間関係が持っている心理的側面に微妙な変化の兆しも窺えます。物理的距離の克服が、心理的距離を縮めることに寄与している反面、生の現実感から切り離されて、人工的に処理された映像と触れ合うという一種の隔靴搔痒感が生じているのです。透明なアクリル板を挟んで対面している如き間接性ゆえの、現実感覚のズレや場の全体的繋がりの分断です。こうしたツールの画面越しの対面による間接的な現実感覚も、科学が進歩すれば、克服されることになるでしょう。

それはそうと、社会的距離ですが、そもそも距離とは何なのでしょう。肉体と肉体の間に介在している距離は、本当に存在するのでしょうか。この問いは、確かに奇妙な問いではあります。通常の場合は、「距離は存在するに決まっている」ということでしょう。実は、若いときから何度も何度も疑問に思ったことがあります。それは、人が何もの(何ごと)かを思うとき、思う人と、その何もの(何ごと)かとの間には、主客の分立・相違はあっても、主客の距離はないのではないか、という素朴な疑問です。意識というものは、知覚であれ、感情であれ、想像であれ、認識であれ、意志であれ、常に

何ものかについての意識です。現象学の用語では、意識の志向性(intentionality)といいます。意識において、志向作用(ノエシス)は、志向対象(ノエマ)と不可分ですが、それは距離と無関係に成立するのではないか。たとえば、私が金星を思う時、その限りで、私と金星は不可分であって、両者の間に距離はないのではないか。勿論、物理的距離は介在している(かに見えます)。しかし、金星を思う時、その物理的距離とは無関係に一瞬の内に金星と結びつくのです。私も金星も、物理的次元を超えた次元を持っていると考えねばならないでしょう。このように、主観と対象の志向的關係性は、量子の非局在性に似て、およそ「距離」概念を超えたところ、いわば無距離に於いて成り立っているのではないか、という素朴な想いです。この無距離の中で、共感や反感、好悪などの心理的感情的な要因が働いて、遠近様々な距離が生まれていることは、断るまでもありません。人間関係としての人間は、本来無距離の中に様々な距離を作り出すものなのかもしれません。人間という存在は、Oneness(一つ)と Diversity(多様性)が絡み合った織物です。ただ、私たちの現実感覚が余りにも物質世界に密着していること、ここに大きな落とし穴があるのではないのでしょうか。

「社会的距離」は、人と人の間柄としての関係性を物理的次元に還元した限りでの距離ですが、そこに心理的距離も関わっているはずであるし、何よりも霊的次元では人と人が互いに現存し合うような無距離でしょう。対象化を拒んでいつも一緒なのが、現存です。そう考えると、人間という摩訶不思議な存在は、「距離と現存(無距離)」の共存という逆説の中で生きています。自分の中に「距離と現存」が共存しているのです。ここから次の問いへと導かれます。「自分に向き合う」という時、誰(どの自分)が誰(どの自分)に向き合うのか、というこれまた不思議な問いです。

(2020/05/15 棚次正和)